

# 植民地朝鮮における高木市之助

小松 靖彦

※本稿では歴史的用語として「朝鮮」「朝鮮人」の語を用いる。

※引用文中には、今日から見て差別的な表現も含まれるが、歴史的資料性を考え、原文のまま引用する。

## 一 高木市之助と植民地朝鮮

〈戦争と萬葉集〉というテーマにとつて最も重要な課題の一つは、植民地朝鮮（一九一〇～一九四五）における『萬葉集』の受容である。

太平洋戦争下、日本文学研究者の徐斗録（ソドダク、一九〇七～一九九四）、詩人の金億（キムオク、一八九三～一九五〇）は『萬葉集』を朝鮮語に翻訳した。また、京城の中学校で学んだ韓国・朝鮮研究者の田中明（一九二六～二〇一〇）は、戦後の一九七〇年代半ばに、京城高等商業専門学校に進学した同級生（日本人）の友人金氏が、酒食の会の二次会で、突然立ち上がって「海ゆかば」（詞は『萬葉集』の伴家持の「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌一

首并せて短歌」の長歌（巻一八・四〇九四）に引用された伴氏の言立て（誓いの詞。信時潔作曲）を歌い始めたことを記す。気づくと自分も懸命に歌っていた田中は、この経験を「歴史の一時期を共に生きた者同士が、政治などでは汲み上げることのできない胸底にあるものを、こんな機会にでもと、交信し合ったのではなかったか」と受け止めている。

植民地時代、『萬葉集』は高等教育を受けた朝鮮の人々の間で受容され、その心底に戦争の時代の記憶を深く刻み付けるものとなった。植民地朝鮮における『萬葉集』の受容を、朝鮮における日本の「国文学」の「移植」や、日本の文学者と朝鮮の文学者の交渉を視野に入れて歴史的に解明することは、今日、日本と朝鮮半島の人々が、『萬葉集』をめぐる議論し、その研究を進め、相互理解を深めるために、潜り抜けなければならぬ道であると思われる。

本稿は、その出発点として、高木市之助（一八八八（明治二二）

二月五日（一九七四（昭和四九）二月二〇日）の植民地朝鮮における研究と教育の歴史的検討を試みたい。高木は、『萬葉集』を始め、記紀歌謡、『古事記』、『平家物語』、中世・近世歌謡、芭蕉など、幅広い分野に亘って、日本文学を（文芸学）的に研究した日本文学研究者である。

高木は、一九二六年から一九三九年までの二三年間（三八～五一歳）、京城帝国大学教授として研究と教育に従事し、九州帝国大学教授転任（一九三九年四月一日）<sup>5</sup>後も植民地朝鮮と関わり続けた。高木の日本文学研究の骨格は、この京城帝国大学教授時代に形成された。しかも、京城で発行された雑誌に発表した文章が、高木の主要な研究と思想の出発点となっている。

『萬葉集』を朝鮮語に訳した徐斗鉢は、京城帝国大学での高木の教え子である（徐斗鉢は植民地時代に梨花女子専門学校教授。解放後にアメリカ合衆国に留学し韓国文学を研究。ハーバード大学、ワシントン大学で研究と教育に従事）。高木は、講演会、ラジオ放送、「国語講習会」の講師も度々務め、植民地朝鮮における、日本文学の普及に努めた。

朝鮮総督府学務局と強い繋がりを持ち、長期に亘り朝鮮総督府視学委員<sup>6</sup>を務め、日本文学研究者として、また元文部省図書監修官として、朝鮮における「国語教育」に携わった。朝鮮の「国語教育」に強い影響力を持った朝鮮総督府編修官・森田梧郎（一八九六～一九五〇）<sup>7</sup>も高木の教え子である。

植民地朝鮮における高木の経歴を辿ると、彼が一般の「帝国

大学教授」ではなく、朝鮮有数の文化人としての地位を占めていたことがわかる。

高木は、一九二四年（大正一三）一〇月一三日に、朝鮮総督府京城医学専門学校教授に就任したが、同校に赴任せず、同月に朝鮮総督府在外研究員として、「文学研究法研究」の目的で、ヨーロッパに留学した<sup>9</sup>。一九二六年四月一日に、京城帝国大学教授に就任<sup>10</sup>。帰朝までは定員外の取り扱いとされた<sup>11</sup>。その後、以下の要職を占めた。

・ 朝鮮総督府視学委員（一九二七年一〇月一九日任命～一九三二年三月、一九三五年四月～一九三九年三月）<sup>12</sup>

・ 京城帝国大学法文学部長（一九三二年三月～一九三三年三月）<sup>13</sup>

・ 高等官一等（一九三三年九月。朝鮮総督府平安北道知事・石川登盛と同時陞叙）<sup>14</sup>

・ 京城教化団体聯合会龍山教化区教化委員会顧問（一九三四年二月。朝鮮軍司令官・川島義之、第二〇師団長・梅崎延太郎、京城日報社長・時実秋穂、元京城検事正・長尾戒三とともに就任）<sup>15</sup>

・ 京城帝国大学附属図書館長（一九三四年三月～一九三五年五月）<sup>16</sup>

・ 京城帝国大学評議員（一九三五年六月～？）<sup>17</sup>

・ 朝鮮文芸会座長（一九三七年五月）<sup>18</sup>

「京城日報」、「朝鮮新聞」が高木の動向を度々報じているのも、彼が朝鮮を代表する文化人の一人であったからに外ならない。

高木は、植民地朝鮮における『萬葉集』の受容はもちろん、日本の「国文学」の移植、日本の文学者と朝鮮の文学者の交渉

においても鍵となる重要な人物と言える。

本稿では、植民地朝鮮における高木の研究と教育の変化を俯瞰する。高木の研究と教育は、滞在初期には、朝鮮の民謡や朝鮮語への関心を寄せつつ、〈世界性〉の可能性を宿していた。ところが、一九三五年から〈民族性〉に重心を移していく。一九四〇年には、〈世界性〉に回帰し合理性を志向しながらも、それが非合理的な天皇への崇敬と無媒介に共存するという異形のものとなっていた。この螺旋的軌跡を描かせたものが何であつたかを見つめたい。

なお、本論は高木の滞在初期の研究と教育に〈世界性〉の可能性を認めるが、それは植民地朝鮮における高木の立場を擁護するものではない。高木が支配者側として植民地政治を積極的に行つたことは動かない。しかし、それを直ちに断罪する立場も採らない。なぜ高木がこのような軌跡を辿り、被支配者である朝鮮人から遙かに遠い地点に到達してしまつたかを歴史的に明らかにすることをめざす。植民地支配に関わつた日本文学研究者の本質的問題点を別決することこそが、同じ過ちを繰り返さないための歴史的教訓を得る方途と考えるからである。

## 二 高木市之助の朝鮮人認識

植民地朝鮮における高木についての先行研究の評価は必ずしも十全なものとは言えない。

その理由は、『高木市之助全集』（以下、『全集』）に収録されて

いない、朝鮮時代の高木の著作が十分に利用されていないからである。しかし、理由はそれだけに止まらない。高木の朝鮮人認識に、極端な差別意識が見られないからである。歴史学者の趙景達<sup>21</sup>は、日清戦争（一八九四―一八九五）の頃から、日本人は朝鮮人を「懶惰」と見るようになった、と言う。それは、日本近世の〈通俗道德〉（勤儉・儉約・謙虚・忍従・正直・敬虔・粗食）と近代の諸価値（資本主義を支えるプロテスタントイズム）が融合した倫理観が、日清戦争の勝利によって前面に現れてきたことによる。そして、朝鮮総督府はこの朝鮮人「懶惰」認識に基づいて、朝鮮の〈近代化〉と資本主義化を押し進めた。<sup>22</sup>

ところが、戦後の高木の回想録『国文学五十年』（岩波新書、岩波書店、一九六七・二）や『尋常小学国語読本』（中公新書、中央公論社、一九七六・二）だけでなく、朝鮮時代の高木の著作にも、当時の日本人に一般的であつた朝鮮人「懶惰」認識が全く見られないのである。朝鮮時代の高木の著作には、他民族への差別的発言が見られるが、明確に朝鮮人に特定してのものは、「朝鮮に於ける国語教育」（『教育』第1巻第6号、一九三三・九）が指摘できると止まる。高木は、朝鮮人にとつての、日本語の発音（語頭の濁音、語中の清音）の難しさが、それを聞く日本人に誤解を生んだ実例を紹介した上で、「かうした清濁の転換が頻々と起れば時には重大な誤解も起り、それ程でなくとも、その表現は著しく渋滞し、聴取者は動もすれば吃音者の話を聴いているやうな不快と焦慮とを感ずる」と言う。<sup>23</sup>

また、植民地朝鮮における「国語教育」に日本古典が必要であることを主張した「古典の世界」(「文教の朝鮮」(京城・朝鮮総督府学務局内朝鮮教育会) 第179号、一九四〇・七)における次の発言も、差別的と捉えることができるかもしれない(傍線は引用者以下同)。

「……率直に言つて朝鮮に一番缺けてゐるものは古典文学であるが、幸にして奈良朝乃至王朝の文学はそのまゝ、朝鮮為の古典でもあり得るのである。真に内鮮一体ならしめるものは、何よりも先づ自然にして純真な、かうした古典文学の世界である。かうした命題を私は私の良心を以てあらゆる朝鮮の人々に贈る事が出来よう。

高木は朝鮮には「古典文学」がないと断言するのである。

このように高木の朝鮮人認識には、朝鮮人の習慣や身体的側面に対する差別意識は希薄であるが、その一方で、文化的には日本人が常に朝鮮人に対して優位に立っているという意識が認められる。高木は、文化的優位の意識に立って、「良心的」に、朝鮮人の、日本語の発音に関する困難をクリアすること、あるいは、朝鮮に「欠けている」古典の世界を与えることに努めようとしたのである。

高木の朝鮮認識と朝鮮への関わり方は、彼自身が言うように、朝鮮総督府のように強権的ではなく、朝鮮に渡った日本人商人のように打算的でもなかったと言える。戦後の一九六〇年代に、高木は、朝鮮時代の自らの立ち位置について、次のように語つ

ている。

「……たいして自慢になる話でもないが、大学「引用注、京城帝国大学」の教授になつて行つた連中はさすがにちよつと毛色が変わつていた。この連中には少なくともそういうふうになり、どうして朝鮮を征服しようか、朝鮮で財産をためようかと思つて朝鮮へ渡つた者はまず一人もない。「中略」国文学の講座でもそうした大学の中の構造「引用注、治外法権的なあり方」の一つだし、学生にしても私の講義を聴くのは、最初の予想に反して朝鮮人学生もいたし、内地人の学生は多数がいま言つたような向こうで金持ちや地主になつたり総督府の役人の子弟だつたりするとすれば、いちばん植民政治から解放しなければならないのはほかならぬ国文学の講座ではないかとも考えられるでしょう。」「……」

(「国文学五十年」(高木市之助全集) 第九卷、一一〇～一一二頁)  
高木が、京城帝国大学国文学講座を「植民政治」から切り離された一種のアジール(聖域)にしようと考えていたことは、朝鮮人の習慣や身体的側面に対する差別意識の薄さや、文学の自立性を追求した高木の学問的・実践的姿勢からも、偽りではなかったと思われる。

とはいえ、高木が朝鮮人に対して文化的優位の意識を持ち続けていたことを、見逃すことはできない。このような、文化的優位の意識に立つた「良心的」な関わり方が、植民地朝鮮における高木の評価を難しくしているのである。

### 三 日韓における高木市之助の評価

植民地朝鮮における高木についての先行研究の評価の問題点を具体的にみてみたい。

高木の評価に決定的な影響を与えたのは、京城帝国大学教授時代の研究成果をまとめた『吉野の鮎』(岩波書店、一九四一・九)についての西郷信綱の評である。西郷は、『吉野の鮎』において高木が天皇に対して過剰に敬語を用いていることを、方便と捉えた。ただし、これは、『吉野の鮎』が出版統制を意識して書かれたものだ、という戦後の高木の発言(『国文学五十年』、『全集』第九卷、一二三―一二四頁)を鵜呑みにした見解である。その上で、西郷は次のように述べる(傍点は原文)。

「…」だが思うに、学問的成熟にたえられなくなった、京城帝国大学教授という職にある一人の学者が、あの時代にこうしたいわばきわどい主題に挑もうとすれば、その修辭は多少とも奴隸化するほかはなかったのではなからうか。むしろそうした修辭のあやにかかわらず、あるいはそれを通して何が暗示され何が志向されているかを読みとらねばなるまい。真理が奴隸のことに包まれていることだつてありうる。

そして、西郷は、『吉野の鮎』所収論文「吉野の鮎」(初出は、『文学研究九州大学』第27輯、一九四〇・七)の過剰な敬語の向こうに、「制度、上の君主ではなく、あくまで人として、具体的にこれを扱って

いる」(同四八五頁。傍点は原文)ことを見ようとした。

しかし、一九四〇年(昭和一五)という「紀元二千六百年」の年に、高木がこの論文において、たとえ「人として」であつても、古代文学における「大君」を中心とする世界の創造を説いたことの意味は不問に付されている。また、高木が一貫して天皇に対する崇敬の念を持っており、決して天皇制度の批判者ではなかったことも視野の外に置かれている。

西郷は、『吉野の鮎』を、海外の研究への目配りと日本の古典への理解が緊密に噛み合った「学問の古典」と高く評価するが、その背後には、社会的地位から切り離して高木の学問を捉えようとする見方が存在している。

一方、植民地朝鮮における時枝誠記の「国語学」が、朝鮮総督府の政策を輔翼するものであったことを明らかにした安田敏朗は、高木についても、「朝鮮の国語教育について」(『京城帝国大学創立十周年記念論文集 文学篇』(大阪屋号書店、一九三六・一〇)に基づき、『国文学五十年』と『尋常小学国語読本』を補助資料として、以下のように切り捨てた。

「…」日本という「大國」の言語を押しつけてはばからない、「国語」の論理で自らみずかが語っていることに気が付いていないのである。なるほど、高木は「国語」の学習についてはそれを「負担」(引用注、日本語を母語としない朝鮮人にとつて)であるとは見なしていた。しかしそれを「国民精神を鼓舞こゝろづから涵養かんよう」するものとして、基本的に肯定している点で総督府

の政策の忠実な実行者であったことを確認しておきたい。<sup>24)</sup>  
植民地朝鮮の「国語教育」に関して、高木は、滞在初期には異なる可能性を秘めていたが、結局は「総督府の政策の忠実な実行者」となってしまったのは事実である。

しかし、高木は「植民政治」と距離を置こうとしながら、なぜ、「総督府の政策の忠実な実行者」となってしまったのか。このことは、論文「吉野の鮎」が、天皇を「制度上の君主」として無批判に崇める風潮を批判しながら、結果的には天皇賛美をより論理的に強化するものとなっていることと軌を一にしている。

植民地朝鮮における高木の研究と教育をトータルに捉えつつ、なぜ高木が権力の側の実行者となっていたかを明らかにする必要がある。<sup>25)</sup>

朝鮮時代の高木についての安田の批判を知りつつも、近時、高田祐彦は改めて高木の立場を擁護している。高田は高木の『日本文学的环境』（日本文学大系、河出書房、一九三八・二二）を高く評価する。この独創的な日本文学環境論が、京城の地にあつて、「内地」の風土からも、また『萬葉集』の「清なるもの」からも切り離されるといふ「二重の喪失」を抱えることよつて生み出されたものと見た上で、次のように述べる。

「……もとよりたしかな根拠もなく、感傷的な把握かもしれないが、京城帝大という総督府と並ぶ権力の場にあつて（大学教授と政治行政の支配者とは異なるとはいへ、万葉の価値

は価値として明らかにして、しかし、古典の限界はわきまえる、というしかるべき学的態度を保持したことは、銘記しておきたい。<sup>26)</sup>

確かに、『日本文学的环境』において、高木は「しかるべき学的態度」を保持していた。一九三〇、四〇年代の他の「国文学者」たちと異なり、日本文学における自然を論じるに際して、声高に「日本精神」や「日本的なるもの」を主張していない。<sup>27)</sup>高田の評価は、西郷の評価に回帰するものと言える。しかし、朝鮮時代の高木の研究をトータルに捉えようと、それは決して「権力」の磁場を逃れていない。「しかるべき学的態度」がとられていると見える『日本文学的环境』にさえもその力が及んでいふことを見逃してはならない。

以上は日本側の研究における高木の評価である。これに対して、少数ながらも、韓国の研究者による高木の研究と評価が始まっている。

朴光賢は、植民地朝鮮における高木の短歌と、随筆「朝鮮の風景に就て」（『真人』第7巻第7号、一九二九・七）に注目して、高木が朝鮮人の日常から距離を置いて「観察者としてのスタンス」を保っていることを指摘する。そして、高木の「国文学」が、理念的にはこれに組み込まれるはず（植民地の朝鮮人は「日本国民」のはず）の朝鮮文学から距離を置いて、優越する「民族」の歴史として「国文学史（『日本文学史』）を描こうとしていたと捉える。

「…」民族文学を研究する高木としては、植民地体制という当時の状況ゆえに、朝鮮での「国文学」研究という範疇を、意識的にも無意識的にも京城帝大の外部に拡大しようとはしなかったと考えられる。このような意識の中には、朝鮮民族を相手に本能的に「民族の異同」「引用注、高木『国文学五十年』に出てくることば」を感知した帰属意識に止まらず、「国語」によって成り立っている学問である「国文学」という権威に対する強い執着も存在していたはずである。

朴光賢の論は、高木の排外的「国文学史（『日本文学史』）」を、解放後の韓国の「国文学史（『韓国文学史』）」の排他的民族主義にも繋がるものとして、自らの側にも引き受けようとする強い問題意識に貫かれていることが注目される。

植民地朝鮮における高木の研究は、日本側では、「学的態度」に基づく大きな成果とされるが、視点を変えて植民地支配を受けた側から見ると、植民地朝鮮と相互的な関わりを持たない、排外的なものでしかないのである。また、高田の言う内地の風土の「喪失」は、朴光賢の見方に立てば、朝鮮の風土への「絶縁」に外ならない。このような評価の違いを私たちはどのような受け止めればよいのか。

朴光賢の論は大筋として納得できるものである。しかし、その高木批判は、一九三〇、四〇年代の、「排外的」で「民族主義的」であったほとんどの「国文学者」たちにも当てはまるという弱点がある。

それゆえ、日本側の高木の評価は、この批判を受けても揺らがないであろう。高木だけが「排外的」で「民族主義的」であったのではないとされ、むしろそうした「国文学者」の中にあつて、声高に「日本的性格」や「日本精神」を叫ばず、「学」の節度を守ろうとしたとして、より高く評価されることになるかもしれない。また、「排外的」姿勢であったとしても、その研究成果にはそれを超えるものがある、という反論がなされる可能性もある。

議論を平行線で終わらせずに、植民地朝鮮における高木の研究と教育を歴史的に評価するためには、高木独自の〈日本文学学〉（朝鮮における「国語教育」もこれに連なる）の構造に肉薄する必要がある。

高木の〈日本文学学〉は、一方で〈世界性〉を、他方で〈民族性〉を志向するという構造を持つ。そして、朝鮮総督府の政策の変化、「内地」転任後は大日本帝国政府の政策の変化に応じて〈世界性〉と〈民族性〉のバランスを変えてゆく。しかも、時代の風潮が、〈世界性〉と〈民族性〉のどちらか一方に大きく傾くと、それに強く反発する力が働く。その時代の常識的な見方・考え方を学問的に否定し、本当はこうである」と主張するのである。

このような独特の柔構造を持つ高木の〈日本文学学〉の変化を丁寧な跡付けることによって、高木の研究と教育についての正当な歴史的評価を下すことが可能となるのではないか。

なお、先行研究は、戦後の『国文学五十年』と『尋常小学国語読本』を資料として重視してきた。しかし、これらには十分な警戒が必要である。高木は全てを語ってはいない。そこに示された高木像は、あくまでも戦後の高木が描いた、あるべき自画像であることを忘れてはならない。朝鮮時代から敗戦までの高木の著作を第一次資料、「朝鮮総督府官報」、「京城日報」、「朝鮮新聞」などを補助資料として（内地新聞の朝鮮版は重要であるが未調査、それらから結論を導き出した上で回想録を用いる、という手順を踏みたい。<sup>20</sup>）

#### 四 植民地朝鮮における高木市之助の研究と教育の全体像

第一次資料に基づき、植民地朝鮮における（敗戦まで含む）高木の著作のテーマを、その開始順にまとめると次のようになる（随筆、新聞記事なども含める。高木の著作については、私が作成した「植民地朝鮮における高木市之助年譜と著作一覧」<sup>20</sup>参照）。

- ① 軍記物の研究……出発点は一九二二年（明治四五）提出の卒業論文「叙事詩として見たる平家物語」。植民地朝鮮では一九二六年一〇月発表の「軍記物の本質」（『国語と国文学』第4巻第4号）から。
- ② 歌謡の研究……出発点は一九一六年（大正五）〜一九一七年の連載「民謡の心理的起源（一）」（3）」（『薄明』）。植民地朝鮮では一九二七年六月発表の「あめりかの鴨緑

江節」（『文教の朝鮮』（京城朝鮮総督府学務局内朝鮮教育会編集・発行）第22号）から。

- ③ 『萬葉集』の研究……出発点は一九二七年（昭和二）八月発行の編著『萬葉集』（久松潜一共編、中興館。「高等程度の諸学校の教科書」（『例言』）。一九二九年一月発表の「萬葉の魅力」（『萬葉時代』（京城・京城帝国大学法文学部萬葉時代編輯部編集・発行）創刊号）以後、本格的に論文を発表。

- ④ 〈文芸学〉的研究……（『文芸学』）による、〈自然〉以外についての個別研究とその方法論。出発点は一九二九年一月三日付朝刊の新聞記事「蛇文学」（『朝鮮新聞』第9925号）。

- ⑤ 〈自然〉についての〈文芸学〉的研究……出発点は一九二九年七月発表の「朝鮮の風景に就て」（『真人』（京城・真人社）第7巻第7号）。

- ⑥ 朝鮮の「国語教育」についての研究……出発点は一九三〇年六月一日付の新聞記事「朝鮮語に親しむ」（『朝鮮教育新聞』第94号）。

- ⑦ 文芸における天皇についての研究……出発点は一九三八年四月刊行の「明治天皇御製謹話」（『ラヂオ講演・講座』（日本放送協会編、東京・日本放送出版協会発行））。

他に、以上の七テーマに分類できない、随筆など数編がある。<sup>26</sup>植民地朝鮮における高木の著作の内容に注目すると、次のような時期区分が可能である（『表』参照）。

〔表〕 植民地朝鮮における高木市之助の著作 (※=未見、\* =重出)

時期	①年記物の研究	②歌謡の研究	③『萬葉集』の研究	④(文芸学)的研究	⑤(自然)について の(文芸学)的研究	⑥朝鮮の「国語教育」 についての研究	⑦文芸における天皇 についての研究
(1) 1926/04- 1932/03	1926/10、1927/4 軍 記物の本質	1927/06 あめりかの 鴨緑江遊 1928/10 日本詩歌の 母胎の一考察 1931/01 民謡と文学 1931/09 山家鳥虫歌 と近世歌謡の一面	1928/08 『萬葉集』 1929/01 萬葉の魅力	1929/01 蛇文学 1932/01 国文学と日 本文芸学	1929/07 朝鮮の風景 に就て	1930/06 朝鮮語にし たしむ	
(2) 1932/04- 1935/03	1934/02 文字に於ける 口誦性 1935/03 観記物と国 語教育	1932/04 『古代民謡史 論』 1932/10 今様は七五 調に非ず 1933/08 再び今様の 形式に就て 1933/12 叙事詩と上 代文学 1934/08 倭建命御葬 歌に就て 1934/09 記紀時代人 の生活*	1932/05 萬葉集が待 つ魅力(上)(中)(下) 1933/09 萬葉集の表 現美に就て*	1932/03 短歌の社会性 1933/10 日本文学研究 法	1933/09 萬葉集の表 現美に就て* 1934/06 朝鮮名物を 語る 1934/09 記紀時代人 の生活*	1933/09 朝鮮に於ける 国語教育	
(3) 1935/04- 1937/07	1937/01 年記	1935/04 民族文学と しての記紀歌謡 1935/12 古事記歌謡 に於ける仮名の通用 に就ての一試論 1936/01 記紀歌謡の 感動 1936/09 芥明児童謡 の用字に就て 1936/11 記紀歌謡の 比較に就て	1935/12 『萬葉集総釈 第八』 1936/01 萬葉集防人 歌の鑑賞 萬葉集巻一 81~84	1937/04 芳賀博士の 学風 1937/07 国文学に於 ける次の段階	1935/08 妙香山水 1936/11 泉	1936/10 朝鮮の国語 教育について 1937/05 懸賞募集了教 育者の歌(選後の感想)	

(4) 1937/08- 1939/12	1938/07 軍記物語の 一つの意義	1938/01 変字法に就 いて 1939/03 御製を通じ て神武天皇を仰ぎ奉 る❖❖* 1939/04 記紀から萬 葉へ*	1937/09 防人の妻の 歌鑑賞 1938/01 文学に於け る文字の役割 1938/10 萬葉集に於 ける清なるもの* 1938/11 象山考* 1939/02 二つの生 1939/04 記紀から萬 葉へ*	1937/09 『国文学の文 芸学的研究』 1938/08 日本文学へ の関心と理解(アン ケート) 1938/10 文芸道と臣 道* 1939/10 国学と国文学	1938/10 萬葉集に於 ける清なるもの* 1938/11 象山考* 1938/12 『日本文学 の 環境』 1939/04 記紀から萬 葉へ*	1938/03 喜劇にその のく	1938/04 明治天皇御 製護書❖❖* 1938/10 文芸道と臣 道* 1939/03 御製を通じ て神武天皇を仰ぎ奉 る❖❖*
(5) 1940/01- 1945/08		1940/02 倭建命と浪 漫精神* 1940/07 吉野の鮎* 1941/09 『吉野の鮎』 1941/12 国見放* 1942/01 歌垣の歌の 鳥* 1943/11 撃ちてしや まむを正解せよ❖❖* (1944/10 古事記大宣 都比売の用字に就て)	1940/01 日本国民訓 解説『海行かば』の解 * 1940/07 吉野の鮎* 1941/09 『吉野の鮎』 1941/12 国見放* 1942/03 しこの御楯* 1942/04 防人の歌一 言* 1942/08 防人歌と国 家的精神* 1942/09 なのりその花 * 1943/11 山*	1940/08 日本文学の 理念とその技術につ いて 1943/10 大東亜建設と 国語国文学のあり方 1943/11 みやびの原 精神* 1943/11 古文芸と創 造的な精神*	1941/06 日本文学史 と海洋意識 1941/09 『吉野の鮎』 1941/12 国見放* 1942/09 なのりその 花* 1943/11 山*	1940/07 古典の世界	1940/01 日本国民訓 解説『海行かば』の解 * 1940/02 倭建命と浪 漫精神* 1940/07 吉野の鮎* 1941/09 『吉野の鮎』 1942/01 歌垣の歌の 鳥* 1942/03 しこの御楯* 1942/04 防人の歌一 言* 1942/08 防人歌と国 家的精神* 1942/11 愛国百人一 言略略解❖❖* 1942/12 愛国百人一 言余談❖❖* 1943/03 望東尼隨想 1943/11 みやびの原 精神* 1943/11 撃ちてしや まむを正解せよ❖❖* 1943/11 古文芸と創 造的な精神* 1945/04 『明治天皇御 製百首』

・「訓話 私の靈葉」(『木馬』第3号、1936・6)、「日本文学に於ける用字の意義」(『日本語学振興委員会報告』3、1938・9)、緑旗聯盟編『日本国民訓』(第4版、1939・4  
※編集に関わったか)、「国文学を通じて見たる日本精神の特質」(『熊本図書館報』1940・3)、「国語や国字を議するには」(『西日本新聞』1942・9)、「大東亜の新拍撃」(『朝  
日新聞』1942・10) については、原本・原記事を探すことができず、内容不明のため、表には入られていない(なお、未見のものでも題名から内容がわかるものは表に入れた)。

(1) 一九二六年四月～一九三二年三月

② 歌謡（特に民謡）の研究が活発に行われた時期。民謡の研究では、欧米・朝鮮の民謡や、欧米の民謡研究の理論に関心を向ける。

③ 『萬葉集』の研究、④ 〈文芸学〉的研究、⑤ 〈自然〉についての〈文芸学〉的研究、⑥ 朝鮮の「国語教育」についての研究にも萌芽的研究が現れる。

この時期は、三・一運動を受け、総督府が朝鮮民族を統治下に置こうとした「文化政治期」に当たる。

(2) 一九三二年四月～一九三五年三月

引き続き②歌謡の研究が活発に行われたが、民謡よりも、日本文学の〈始まり〉としての記紀歌謡に意識が向けられていく。

③ 『萬葉集』の研究では、「祖先」が意識され、⑤ 〈自然〉についての〈文芸学〉的研究では朝鮮に残る近代化以前の川の姿に注意が向けられ、⑥ 朝鮮の「国語教育」についての研究では、「日鮮相似」が主張される。

この時期は、「満洲事変」(一九三二年九月勃発)、第一次上海事変(一九三三年一月～三月)、「満洲国」建国(同年三月)が相次いで起こった時期。植民地朝鮮はまだ「文化政治期」であるが、総督に宇垣一成が就任し「内鮮融和」や「国民精神の作興」を主張。

なお、この時期に高木は、京城帝国大学法文学部長、高等官一等、京城教化団体聯合会龍山地区教化委員会顧問、京城帝国

大学図書館長など要職を歴任。

(3) 一九三五年四月～一九三七年七月

研究の中心はやはり②歌謡の研究である。しかし、(1)・(2)の時期にあった日本以外の民謡への関心は希薄になり、日本人が「文化民族」であることを主張しつつ、日本文学の〈始まり〉としての記紀歌謡の研究が深められる。また、記紀歌謡の用字に関心が向けられる。

③ 『萬葉集』の研究では、防人歌の鑑賞が発表される。⑥ 朝鮮の「国語教育」についての研究では、朝鮮総督府視学委員としての調査結果をもとに、「国民精神」普及のための「国語」教育の具体策が示される。

この時期に、植民地朝鮮は「内鮮一体」を主張する戦時動員体制期に向かい、総督・宇垣一成主導の「心田開発運動」が始まる。また、緑旗聯盟が結成され、「緑旗」を創刊。宇垣後任の総督・南次郎が「国体明徴」「鮮満一如」・「教学振作」・「農工併進」・「庶政刷新」の五大政綱を発表する。

なお、この時期に高木は、二度目の朝鮮総督府視学委員、京城帝国大学評議員に就任。

(4) 一九三七年八月～一九三九年一月

④ 〈文芸学〉的研究において、文芸の「超時代性」・「超階級性」や「永遠性」・「世界性」を激しく否定する。

研究の中心は、⑤ 〈自然〉についての〈文芸学〉的研究に移る。自然表現の日本的な性格を問題にするが、抽象的に「日本

精神」や「日本的なるもの」を主張はしない。

一方、⑦文芸における天皇についての研究が始まる。その中、および④〈文芸学〉的研究において、「道」の追究が主張される。

この時期には日中戦争（一九三七年七月）が始まり、ドイツがポーランドに侵入し（一九三九年九月）、第二次世界大戦が勃発する。植民地朝鮮では、朝鮮教育令が改正され、日本人と朝鮮人の共学が行われるようになる。

なお、この時期に高木は、ラジオで明治天皇御製や神武天皇について講話し、忠清南道教育会で講演し、また、総督府学務局主催の「小学唱歌」審査会審査員を務める。

(5) 一九四〇年一月～一九四五年八月

研究の中心は、⑤『萬葉集』の研究と⑦文芸における天皇についての研究となるが、両者は重なる。大伴氏の言立て「海行かば」、防人歌、柿本人麻呂時代の「大君」の詩精神の研究において、抽象的な通説を批判しながら、天皇への絶対の帰依随順を読み込む。

これと軌を一にして、④〈文芸学〉的研究では、南方現住民に対して「空虚な優越感」を持つことを否定しつつ、日本が「大東亜文化」の優れた指導者となることを主張。⑥朝鮮の「国語教育」についての研究では、日本古典には「国際的普遍性」があり、これを朝鮮に広めることを説く。

一方、⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究では、(1)・(2)の時期に見られた、欧米・朝鮮との比較研究を用いしつつ、日本

文学の「海洋意識」についての通説を批判する。

この時期には、紀元二千六百年祝典（一九四〇年）が挙行される。翌年太平洋戦争開戦。

なお、この時期に高木は、九州帝国大学教授、同法文学部長、福岡県教育振興会視学委員、日本諸学振興委員などを務める。

以上によれば、植民地朝鮮における高木の研究と教育が、初期には〈世界性〉に傾いたものであったが(1)・(2)、やがて〈民族性〉に重心を移してゆき(3)・(4)、最終的には〈世界性〉に回帰するものの、その合理性が、天皇への非合理的な崇敬と無媒介に共存する(5)、という螺旋的な動きを示したことが見て取れる。

## 五 高木市之助の〈日本文芸学〉

植民地朝鮮における高木の研究と教育の理論的基盤となつているのは、〈日本文芸学〉である。「日本文芸学」という用語は、一九三四年（昭和九）一〇月に岡崎義恵が発表した論文「日本文芸学の樹立について」（『文学』第2巻第10号、翌年一月二月刊行の『日本文芸学』（岩波書店）以後、その理論の徹底性ゆえに「岡崎理論そのものだけをさしている名称となつてしまった」（阿部秋生<sup>5)</sup>。しかし、高木は岡崎理論以前に、独自の〈日本文芸学〉を構想していた。その構造がもっともわかりやすい形で主張されているのが、(1)の時期の「国文学と日本文芸学」（『国語と国文学』第9巻第1号、一九三二）である。その主張の要点は以下で

ある。

① 「日本文芸学」は、「日本—文芸学」（日本の、あるいは日本の文芸学）の意である。

② 「国文学」の当面の目標がまず「日本文学」であるのに対して、「日本文芸学」の当の目的はまず文学自体である。

③ 「文芸学」に対して「日本文芸学」という中間的存在が必要なのは、対象である文学が、ことばという表現に即した存在であるため、各国語の言語の特性に支配されており、また各国の文化と他文化との間の「差別的側面」に関連することが特に多いからである。

④ 「文芸学」は文学的体験を基礎としているため、イギリス人の文芸学的研究は英文学的であり、ドイツ人のそれはドイツ文学的となる。日本人の文芸学的研究も日本文学的になることは必然である。

⑤ 「国文学」の「国」にはいかにも差別的、主観的なものが感じられるのに対して、「日本文芸学」の「日本」には科学的、客観的な学が表れている。

つまり、高木の〈日本文芸学〉は、〈文学〉の解明をめざす〈学〉であるが、各国の言語と文化に差異があるため、日本文学についての文学体験を通じてそれを果たす、というものであった。それは、日本文学に止まらず（言い換えれば、日本文学の特性の確認に終わらず）、〈文学〉とは何かを考える〈学〉である。

それゆえ、高木は具体的テーマを追究するにあたって、日本

文学を西洋の文学理論に照らし合わせ、また海外の文学（西洋に限らずアラビア文学なども）も比較材料に用いたのである。

そして、〈日本文芸学〉の「日本」には科学的、客観的な学が表れている、という高木の考え方によれば、日本文学、イギリス文芸学、ドイツ文芸学などの各国の文芸学は、優劣のない、フラットな位置に並ぶことになる。

また、「科学的、客観的な」学というところには、自然科学的な普遍性も考えられる。高木の〈日本文芸学〉が、計量的データ②の歌謡の研究における、歌謡の一句の文字（今日の言い方ではモータ）数、記紀歌謡における用字の出現数の綿密なデータ採取）を重視したことにそれが伺える。

このように高木の〈日本文芸学〉には、ドメスティックな「国文学」を超える〈世界性〉への強い志向が潜在していた。

しかし、その一方で、高木は、日本文学の「差別的属性」（≠他の文学との差異）にもこだわった。すなわち、あくまでも日本文学の領域内に踏みとどまろうとして、〈世界性〉とは逆方向に向かう力も強く働いている（なお、②の時期以降、日本文学の「差別的属性」は、〈民族性〉と表現されるようになる）。

その結果、〈文学〉の解明という、高木の〈日本文芸学〉の本来の目標に到達するための方法が不明確なものとなった。日本文芸学、イギリス文芸学、ドイツ文芸学などが並び立つところに止まり、それぞれの文芸学が解明したものを重ね合わせ、もう一段高次の〈文学〉を研究するための道筋は示されないの

である。

高木の〈日本文芸学〉は、〈世界性〉と〈民族性〉という反発し合う二つの力が共存する構造となっていた。

## 六 民謡論の行方

植民地朝鮮との関わりにおいて、このような高木の〈日本文芸学〉の構造が特に重要な意味を持ったと思われるのが、②歌謡の研究と⑥朝鮮の「国語教育」についての研究である。また、⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究は、日本文学研究の側から、朝鮮時代の高木の大きな果実と考えられている。②・⑥の分析結果を視野に入れつつ、その「果実」がいかなるものかを見極めたい。

②歌謡の研究の中で、朝鮮と関わりながら、最も力を注いだのが民謡論である。先述したように、②歌謡の研究の始まりは、一九二七年六月発表の「あめりかの鴨緑江節」であるが、これは随筆的文章による民謡論である。高木はアメリカ合衆国の森林労働者シャンティボーイ (Shanty boy) の民謡を、「野趣の横溢した中に、しみりとした味があ」と深い共感を込めて紹介した。

同じく(1)の時期の随筆的論文「民謡と文学(濟州島の文学から)」〔朝鮮研究〕(京城・朝鮮研究所編集・発行)第4巻第1号、一九三二(一)では、民謡採集に訪れた濟州島の老婆の歌う民謡に、「その調子は真実であり哀調もあり微妙な所があつた。その歌が終つた

時居合す人が嘆息をついた程であつた」と「あめりかの鴨緑江節」同様の共感を示した。また、「いなと」という架空の島が繰り返し呼びかけられることに、航海に出て永久に帰らぬ人に濟州島の人々が寄せる思いの深さを感じ取った。そして、高木は独自の民謡論を展開する。その要点は以下である(「」は私の注。以下同)。

i 民謡は、心の発達が組織立つた教養ではなく、環境、精神、社会に依るコモンプールが作った歌謡である(セル・シャープ [Cecil James Sharp (1859-1924)] の説に拠る)。

ii 民謡の在り処は、(a)未開民族(アイヌ、黒人)、(b)文化人の間のコモンプール(濟州島、「内地」の佐渡、大島、南紀等、英国の南田舎、「ジブシイ」[今日ではロマ]、アメリカ森林地帯の「ラムバー・ジャワキス」[Lumber jakesか])、(c)古代の文献である。「おい兄弟と云つて叩かれて、ほ、えんで振返るような気持ち」。

iii 民謡の根本的性質は、「個」に対する「民」である(「おい兄弟と云つて叩かれて、ほ、えんで振返るような気持ち」)。

iv 民謡の根本性質が「民」であるのは、原始文学が集団的であり、また個人的に成立しても伝播の間に集団的となる(例、メーン州の民謡「ゲーリーの岩のジャム」)から。

v 民謡は文学の母胎であり、「文学の遺物」ではない。今日の文学も民謡へ憧れ、また文学上の革新に閃きを見出すように、民謡は今日の文学に生きている。

この高木の民謡論が、「日本」という範囲を超えた、民謡一般に関する「原論」となっていることに注目したい。(世界性)

への志向がダイレクトに現れている。

ただし、高木は、コモンビープルの心の精神的発達を「組織立つた教養」に依らないと言ひ(一)、「未開民族」「未開人」と「文化人」を対にし(二)。なお、ラムバー・ジャワキスの生活を「原始的」と表現)、「原始文学」ということばを使つてゐる(四)ことに表れているように、(未開—文化)という物差しを使つて、民謡を捉えようとした。この点は大きな問題である。とはいへ、ii)において、濟州島を、「内地」や海外の辺境と並べているように、必ずしも濟州島だけを差別的に捉えていたわけではないことに注意を払いたい。

世界の民謡を同じ地平で捉え、かつ民謡を今日の文学上の革新にも閃きを与える「生きてゐる」ものと見た「民謡と文学(濟州島の文学から)」は、普遍性があり可能性に富んだ「民謡原論」であつたと言える。(1)の時期の「国文学と日本文学」においては不明確な、各国文芸学の研究をもう一段高次の「文学」の追究に進める道筋を示唆した論でもあつた。

高木の民謡論は、この「民謡原論」を枠組みとして、(2)の時期以降に継承されていく。しかし、その過程で、次々と大きな変更が加えられていった。

(2)の時期の小冊子『古代民謡史論』(岩波講座日本文学、岩波書店一九三二—四)では、「民謡と文学(濟州島の文学から)」のv)を引き継いで、民謡と文学の関係を、「民謡の進行は文学の発生を導き、又其の習俗化を排し、時には革新にも参ずる。一言にして尽せ

ば文学活動の最も潑刺たる部分に沿つて流れてゐる」と言ひ切る(ただし、「文学の発生」という新たなファクターが加わつてゐることが見逃せない)。

また、文字との交渉を持つた日本古代歌謡を民謡の資料とするために、文学としての民謡から音楽性を切り離し、「民謡性」という操作概念を設定した。そして、その「民謡性」の内容を、①社会性(Francis Barton Gummel「フランシス・バートン・ガメア 1855-1919」George Lyman Kittredge「ジョージ・ライマン・キトレッジ 1860-1941」Read Smith「リード・スミス 1881-1943」)のCommunal theoryを踏まえる)、②歌謡性(口から耳に伝わる文学として性格)、③素朴性ととした。

この③素朴性について、高木は、二方面を考えた。

⑦「古代から近代へと失はれて行かうとするもの」

①「終始一貫して生き続けてゐるもの」

このうち、⑦は「民謡と文学(濟州島の文学から)」では、主張されていなかったものである。

この新しいファクター⑦の出現と連動しているのが、「民謡が行はれた、或は現に行はれてゐる社会といふのは、原則として、原始的な、単純な、文化程度の低い社会」(傍点は引用者と断言したことである。つまり、高木は、民謡を、「文化程度の低い社会」のものであり、古代から近代へ、文化が發展する中で失われるものと捉えたのである。「民謡と文学(濟州島の文学から)」における「未開—文明」の対比に、歴史性が加えら

れたと言える。

滿洲事変、上海事変と侵略戦争が進められた(2)の時期、高木は、文化程度の高い、日本文学の発生をもたらしたものとしてみ謡を解明する方向に向かったのである。

そして、(3)の時期の論文「民族文学としての記紀歌謡」(『文学』第3巻第4号、一九三五・四)には、一般に考えられている高木のイメージからほど遠い、差別発言が登場する。この論文において高木は「民謡」を「民族文学」の語に置き換え、「民謡と文学(清州島の文学から)」のiiに挙げた三種類の民謡の在り処を次のように言い換えた。

(一)「我々文化民族がその文化の初期に於て、文学に個性が十分表現されてゐない為の民族文学」で、記紀歌謡がこれとする(↑iiの(c))

(二)「文化民族に於て、既に文化が発達し、個性を表現する文学が創作される一方に行はれてゐる民族文学」で、「例へば俗謡とか巷説」、「田植歌、地行歌、舟唄等の労働歌又は之に準ずる民俗」(引用注「吉野の鮎」で「族」に修正)的「歌謡」がこれとする。(↑iiの(b))

(三)「今日の未開民族中に求められる民族文学」で、「例へば亜米利加印度人、ニグロ其他の未開人の諸部落で現に行はれてゐる民謡の類」がこれとする。(↑iiの(a))

その上で、(三)を、もはや、文化の発展を望むべくもないものと見なすのである。

「……」(三)は民俗学や比較文学などで屢々報告されるもので、例へば亜米利加印度人、ニグロ其他の未開人の諸部落で現に行はれてゐる民謡の類で、是等の部落は今日高度文化と接触し、その形体は模倣し得ても(例へば、洋服と肩「引用注、「吉野の鮎」で「を着」に修正、靴を穿くの類)彼等が真に是等の文化を取入れて、欧亜諸文化人の域にまで飛躍する機会があるかどうかは頗る疑はしく、或はさうした機会を待つ以前に地球上から姿を消してしまふのではないかとさへ思はれるのである。換言すれば吾々文化民族が今日のやうな複雑な文化を享有するに至る長い過程の間を原始状態そのまゝ、或は之を距るあまり遠くない情態のまま、で、眠るが如く今日に及んだ是等の諸民族には、単に位置風土其他の外的事情以外に、何かしら吾々と異なつた性質(むしろ缺陷といつた方が適當かも知れない)がありはしないか。「……」

(三)の諸民族の「缺陷」はその文学にも見られ、「我々の古代文学から近代文学を生み出して行つたのは余程事情を異にする」と言う。さらには、(二)についても、「文化の比較的低下の階級又は社会層にのみ訴へるのを原則とする」として、並行して行われている個性的文学から「取残された、少くとも之に比べて一段低位にある文学」と位置付ける。

このような発言には、あたかも、優生思想的な考え方を持つ「欧米人」であるかのような、高慢な眼差しを感じざるを得ない。

これに続けて、高木は、日本文学の根幹をなす和歌を創造した記紀歌謡には「民族文学」としての異常な実力が認められるとして、「文化民族」としての日本人の文学の（始まり）をもたらした記紀歌謡の優秀さを、ことばの限りを尽くして賛美した。

文章の流れによれば、高木は日本文学を世界的に高い文化の一角を占めるものと見ていたことになる。「内地」で、「世界文学」としての『萬葉集』の優秀さが主張されるようになるのは、一九三六、七年頃からである（久松潜一『萬葉集に現れたる日本精神』〈至文堂、一九三七・二〉、中河與一『萬葉の精神』〈千倉書房、一九三七・三〉。これに収録された「世界文学」としての『萬葉集』を主張した文章の初出は一九三六年）。「世界文学」ということばは使っていないものの、記紀歌謡を「後統の諸文学に対して何等のひげ目を感じない、堂々たる民族文学」（傍点は原文）と言い、それがもたらした日本文学を、文化的に高度な「個性的文学」とする高木の見方は、日本文学を「世界文学」と捉える思潮に先んじるものである。植民地朝鮮という環境ゆえに、このような日本文学の「優秀さ」をより強く意識したのであろうか（なお、この論文が発表されたのと同年の一九三五年の一月に「心田開發運動」が始まり、「文化政治期」は終わる）。

濟州島での民謡採集を機に開始された高木の民謡論は当初可能性に富んでいた。しかし、高木が記紀歌謡という日本文学の（始まり）の解明に意識を向けたとき、その可能性の多くは失われた。「民謡と文学（濟州島の文学から）」に潜在した（未開

文化）という対立軸は、単線的な発展段階における文化水準の差を示すものとなり、さらに、その差に生来の「缺陷」を見るという差別的眼差しまでも加えることになった。

高木の記紀歌謡の（民謡性）の研究において残るものがあるとすれば、それは計量的方法による、記紀歌謡中のより古い歌謡の推定に止まるように思う。

## 七 不可解な「普遍性」の論理

民謡論と同様の道筋を辿り、さらに記紀歌謡の（民謡性）の論以上に、非合理的な主張へと進むのが、**6**朝鮮の「国語教育」についての研究である。

その出発点が、(1)の時期の一九三〇年六月一日付の「朝鮮教育新聞」掲載の随筆「朝鮮語に親しむ」である。高木は、子ども<sup>(1)</sup>の持ち帰った「内鮮風俗習慣のしるべ」（京城公立普通学校職員会）<sup>(2)</sup>に对照して記された「内地」と朝鮮の「座席時の姿勢」の違いを紹介して、「内地人がほんとうに朝鮮を理解するといふ事も、実はかういふ、手近い処から段々進んで行けるものと思はれるのです」と述べた。

また、「内鮮風俗習慣のしるべ」と同じような気持ちで、「内地人」が朝鮮語に親しむことが必要であることを主張した。「世間」や「監督官庁」が求める強制的学習はよくないとして、少しずつでも朝鮮語に親しむことが重要と言う。さらには、「正直にいふと、何十年もこちらに住み慣れた先輩の人々が自分達

に左程の必要を感じない処から、各々新来の者に対して朝鮮語学習無用論を説いたり、それ程でなくつても若い人々の朝鮮語の勉強ぶりを冷然と眺めるといふやうな例を私はあまり屢見せつけられたのです」と憤りを見せた。

高木の〈日本文芸学〉は、各国の言語と文化の差異を強く意識するものであった。「朝鮮語に親しむ」の主張も、差異の意識に基づいて、「内地人」が朝鮮の風俗習慣を理解し、朝鮮語に親しむことの大切さを訴えたのである。

しかし、朝鮮の「国語教育」についての高木の研究は、(2)の時期に、総督・宇垣一成の「内鮮融和」の主張を受け、論文「朝鮮に於ける国語教育」(『教育』(岩波書店発行)第1巻第6号、一九三三九)では、「日鮮両民族の核心を貫く本質的相似性といったやうなもの、他の何物よりも、かうした文学芸術の分野に於て、より明瞭に認識理解される」と言い、「国語と朝鮮語との間に認め味ふ事の出来る、形態並びに内容上の契合点近似点」を理解させることで、「国語教育」をスムーズに進めることができる」と主張し、日本と朝鮮の類似性に力点を移す。

そして、(5)の時期の論文「古典の世界」(『文教の朝鮮』第179号、一九四〇・七)で、高木の〈日本文芸学〉は、朝鮮の「国語教育」について、異様な論理を生み出すに至る。日本人と朝鮮人を共学とする朝鮮教育令改正(一九三八年三月)を念頭に置いて書かれたこの論文の骨子は次のようである。

④ 朝鮮人の国語常用は緊急の課題であるが、これと不即不

離に中女学校と小学校の生徒と児童に古典の世界も与えらるる必要がある。

⑤ 古典は昨日から今日へと意義と価値を持ち越してきた、生きた文学である。

⑥ 古典は時間を経て醇化されてきたもので普遍性を持つ。古典の受容において、民族の相違が障害とならないことは、アーサー・ウェーリー [Arthur David Waley (1889-1966)] の『源氏物語』の英訳が示すように「国際的普遍性」を持つ。朝鮮には古典文学が欠けており、内鮮一体を可能にするのは日本の「自然にして純真な」古典である。

⑦ 古典は一般民衆の所有であり、また古典を教えることは、朝鮮の生徒・児童を「純粹に日本的で、しかも一面国境を越えた理想境」に遊ばせることになる。

⑧ 伝統文学の眞精神を学ぶためには、初等教育から古典を学ぶべきである。

⑨ 授業で抽象的な日本精神論や内鮮一体説や、六国史の史実が教えられていることは問題である。当時の心を伝える、表現による古典の世界を教えるべきである。

高木が日本の古典の「国際的普遍性」を強調し、これを「内鮮一体」を実現するものとしたことには驚きを禁じ得ない。というのは、高木の〈日本文芸学〉は(1)の時期の「国文学と日本文芸学」において、各国の言語と文化の差異に注目していたが、(4)の時期の小冊子『国文学の文芸学的研究』(岩波講座国語教育、

岩波書店、一九三七・九）では、歴史と〈民族〉を超えた文学の普遍性を全面的に否定するに至っていたからである（傍点は原文）。

〔引用注、文芸において創作と鑑賞は一体であり、鑑賞は創作者が期待したように行われなければならないと主張した上で〕こゝに、文芸（或は一般芸術）の超時代性、超階級性などといふものを認め得ない一つの根拠があるのである。

「……絶対的な問題として吾々は文芸の永遠性乃至世界性といったやうなものには信ずる事は出来ないけれども、相対的には、或程度迄時処を超越して、過去の作品や、社会を異にしたそれを、文芸として受容する事が許されるのである。」〔一〕

そして、「或程度迄」の受容ができることを示す例として、アーサー・ウェーリーの『源氏物語』の英訳を取り上げた。

確かに、高木は「古典の世界」においても、「芸術はそれ／＼の民族性を有たない普遍的存在である」という考え方を否定している。にもかかわらず、日本の古典は「国際的普遍性」を持ち、ウェーリーの『源氏物語』英訳は、『源氏物語』のもののははれの世界が国境を超えたことを示すものだと言いつつたのである。

「古典の世界」は、「内鮮一体」の実現のために、〈日本文芸学〉の主張を、都合よく歪めたと言わざるを得ない。それは、高木の〈日本文芸学〉に潜在していた〈世界性〉への志向が、「内鮮一体」の実現という圧力のもとで、極めて不健全な形で現れ

出たと見ることもできる。高木の言う日本の古典の「普遍性」の内実は、「真実純真の存在」、「自然にして純真」、「純粹に日本的で、しかも一面国境を超えた理想境」という空疎なことばでしか表されない。

朝鮮の「国語教育」についての研究において、高木は言語と文化の差異を認めるところから、日本と朝鮮の類似性に力点を移し、さらには、日本の古典を即自的に普遍的なものとする異形の〈世界性〉へと向かっていったのである。このような〈世界性〉は、植民地支配を受ける側には到底受け入れられないものであった。

## 八 逃避先としての〈自然〉

日本文学研究の側において、朝鮮時代の高木の研究の最も大きな果実と考えられているのが、⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究である。その素材の多くが『萬葉集』である⑤は、③『萬葉集』の研究とも重なる。

高木は文学における自然を、単純に、存在する実際の自然とせず、文学をとりまくもの、また、文学が価値づけるものと捉え、これを〈環境〉ということばで表した。そして、萬葉人の〈環境〉が「清なるもの」（明瞭にして汚濁ならざるもの）、平安朝の人々の〈環境〉が、「作為された自然」として「みやこ」（自然化した都市、都市に取り込まれた自然）であると指摘した（以上は、主に『日本文学と環境』（河出書房、一九三八・一二）に拠る）。

高木の⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究は、(4)の時期に集中的に進められたが、そのきっかけは、(1)の時期以来朝鮮の自然への関心があると思われる。一九二九年七月発表の随筆「朝鮮の風景に就て」では、東京帝国大学の学生となつて、初めて東京を訪れてまもなく、広々とした武蔵野を散策して、「今まで自分を取囲んでゐた山間の自然」との違和感を覚えたと言ふ。それまで高木は、愛知、福岡、岐阜、淡路島、山形、京都を転々としていた。そして、朝鮮に赴任して、その風景の基調が、日本とは異なる「かげの無い故の明るさ」であることに気づく。

朝鮮のあかるさはポプラの持つ明るさである。ポプラには例へば銀杏の持つやうな光はない。が徹頭徹尾明るさがある。むしろ平明それ自身の姿である。

日本の自然には、どうもかうした明るさを欠く。或はあつても誠に乏しい。〔…〕

朝鮮の風景は、日本の自然を高木に意識させるものであつた。<sup>(5)</sup>

また、(3)の時期の、平安北道（現在、北朝鮮）の妙香山旅行記「妙香山水」〔朝鮮〕（朝鮮総督府発行）第243号、一九三五・八）は、妙香山中の普賢寺の景観に「人と自然の諧調融和」を感じ取つてゐる。「作為された自然」という高木独自の見方の種子がここにはある。

しかし、朴光賢が「朝鮮の風景に就て」に關して指摘したように、高木が「朝鮮人の日常から離れて、観察者としてのス

タンスを保ちながら」朝鮮の風景を捉えていたことは否定できない。

そして、このような高木の⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究は、〈環境〉という普遍性を持つ概念を提示したものの、その視線がもつぱら日本の古典に向けられていることに注意したい。

高田祐彦はそこに「二重の喪失」を見たが（第三節参照）、<sup>(6)</sup>の研究が積極的に行われた(4)の時期が、日中戦争下であること、また、高木が他方では、文芸道と臣道の一体を説き、天皇への奉仕を説き始めること〔文芸道と臣道〕「緑旗」〔京城・緑旗聯盟発行〕第3巻第10号、一九三八・一〇）を考ふるならば、植民地朝鮮における高木の日本の古典の〈自然〉への沈潜は、むしろ精神的な逃避という意味を持つていたと考えられる。それだけに、高木の捉え方には、〈自然〉の理想化が潜んでいる可能性があることに、注意を向ける必要がある。

なお、(5)の時期の論文「日本文学史と海洋意識」〔解釈と鑑賞〕第六巻第六号、一九四一・六）では、高木の〈日本文芸学〉の〈世界性〉への志向が再び躍如としてゐる。欧米の哲学者（Henry Rushon Fairclough, *Love of Nature among the Greeks and Romans*）を援用し、比較材料として、ホメロスの叙事詩、バイロンの詩、濟州島の民謡の「離虚島」を用い、上代日本文学の海洋が、汚穢を清浄なるものに浄化する場所、あるいは清浄な陸地との関わりで意識される場所であることを指摘した。それは、一九三

五年頃から高まる、『萬葉集』を『海の文学』と見なして、日本人の「海洋性」を宣揚する通説<sup>48</sup>への強烈な批判を含んでいた。戦争下において、⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究は、高木にとって最も自由に発言できる場となっていた。しかし、そこには、朝鮮の自然が入ることはなかった。

## 九 〈インターナショナルイズム〉と〈コスモポリタニズム〉

以上のように、②歌謡の研究の民謡論は、当初、濟州島の歌謡に触れた体験を踏まえつつ〈世界性〉を志向したものから、日本文学の〈始まり〉の解明へと向かい、さらには『文化的高低』によって民謡（民族文学）を差別するところまで行き着いた。一方、⑥朝鮮の「国語教育」についての研究は、「内地人」が、日本と異なる朝鮮の風俗習慣と言語を理解すべきであると主張するところから出発して、日本と朝鮮の類似性を重視する方向に転じ、最終的には、日本の古典の「普遍性」を朝鮮の生徒・児童に強要するに至った。その間にあって、⑤〈自然〉についての〈文芸学〉的研究は、朝鮮の風景を鏡として、あるいはこれに示唆を受けつつ捉え直した日本の古典の〈環境〉に、精神的逃避先を見出すものとなった。

植民地朝鮮における高木の研究と教育はなぜこのような軌跡を描いたのであるか。その理由の一つは、見てきたように、高木の研究と教育が、満洲事変などの戦争の勃発や、朝鮮総督

府の「内鮮融和」・「内鮮一体」などの政策に強い影響を受けたことである。高木は、植民地朝鮮における統治者側の有数の文化人としての立場から切り離されたところで研究を進めていたのではなかった。

また、高木の〈日本文芸学〉において、〈世界性〉と〈民族性〉という反発し合う二つの力が共存していたこともその理由である。高木の〈日本文芸学〉は本来、〈世界性〉を強く志向するものであった。しかし、高木は意識的にそれに向かうことを避け、(4)の時期の『国文学の文芸学的研究』では、文芸の「超時代性、超階級性」、あるいは「永遠性乃至世界性」を激しく否定さえした。

高木は、『国文学五十年』において、このスタンスを、一九六〇年代の文脈に沿って説明している（文章は元となった『国文学五十年・7』大学教授時代）『文学』第33巻第10号、一九六五・二〇）の方がわかりやすいため、その本文を引用する。

京城帝国大学教授・佐藤清の教え子の崔載瑞<sup>チェジュ</sup> 씨재서가、正月休暇の夜更けに、酒に酔って高木宅を訪れ、「先生達はどんなに威張ったって僕達朝鮮人の魂を奪うことは出来ないよ！」という凄文句を並べて去って行ったエピソードを紹介。ザメンホフ [Lazaro Ludoviko Zamenhof (1859-1917)] が世界語を否定して、エスペラントを思いついた思想を受けて、「私は朝鮮人との民族意識の交流みたいなもので、謂わば生地<sup>きじ</sup>で体験したようなものですよ」とコメントした後を受けて、

——先生のおっしゃることは今の言葉で言いますとね、コスモポリタニズムでは民族問題は解決しない、やっぱインターナショナルイズムでないと解決しない、ということになりますか。

そうかも知れない。しかしそうなる日韓問題解決策などといった政策くさいものになって私にはよくわからないが、私なりに言えばそういうふうな経験していったことはやっぱり私の国文学にとって成長だということになりませんか。

と、質問者に導かれて、自分の立場を（インターナショナルイズム）と定位している。

さらに、『国文学五十年』の「Ⅷ 終戦をはさんで」（『国文学五十年』8）終戦をはさんで「『文学』第33巻第11号、一九六五・二」で引用）では、戦後のアナキズムのムードに反発して消極的、保守的立場を採ったことについて、「それこそ度々言っているインターナショナルな問題ですが」と注釈をつけつつ、「戦争中に叫ばれた狂信的な『日本！ 日本！』にも、「マッカーサー的考え方」にも、「ソビエット風のやはり或る民族主義的な一つの唯物的勢力」にも賛同できなかったと言う。

この発言はややわかりにくいところがあるが、妄信的なナショナルイズムにも、（コスモポリタニズム）の名のもとの大國主義にも与しない、ということと言っているのである。

実は、（コスモポリタニズム）による民族交流の可能性を、

高木が知っていた節がある。クリスチャンで、総督府から縁の遠い私立のキリスト教関係の学校の教員・椎葉礼民が「超民族的」に朝鮮の人々と交流していたことについて、『国文学五十年』で次のように言う（『国文学五十年』7）『大学教授時代』で引用）。

「……」我が京城帝国大学教授などという御身分で朝鮮民族に同情するのはもう一皮純粹なんです。このことは朝鮮人の側でも言えることで、この椎葉君と一緒に来る人達は——今記憶しているのは孫さんというオールドミスのはないが、京城大学の朝鮮人学生と比べると遥かに純粹なんです。「……」

キリスト教の（コスモポリタニズム）が可能にした「純粹な」民族交流をしっかりと心に刻み込んでいる。しかし、高木は（コスモポリタニズム）を選ばなかったのである。

その理由は、回想録による限りでは、第三高等学校の学生時代に、船乗り出身の英語教師グッドリッチに英作文を細部まで直され、「自国語の強みを見せつけられ」（『尋常小学国語読本』六二頁）、「日本の文学というものがどんなに貧弱でも日本の民族の一人としてはどうしてもこれをやるよりしようがない」（『国文学五十年』、『全集』第九巻、三二頁）と決意したことである。大國欧米人の尊大さへの反発と劣等感が高木の強いトラウマ体験となっていた。

しかし、（コスモポリタニズム）に反発して（民族性）にこ

だわり続けた理由は、それだけではあるまい。

不思議なことに、高木の文章や回想録には、彼と同世代の青年知識人が必ずと言ってよいほど大きな影響を受けたキリスト教、トルストイ、マルクス主義についての言及が見られないのである。インタビュアー記事「次に来るべき古典文学コース——(2) K記者——」(『京城日報』第8982号、一九三二・二七付夕刊(題字下に「十一月廿六日(土)とある))の、古典文学研究が「現代のイデオロギツシユな文学論」をいかに撰取するかについての極めてわかりにくい発言にわずかに感じられる程度ではあるが、朝鮮の独立解放をめざす共産主義運動に危機感を抱いていたことが窺えるようである。

「植民地奴隷教育制度を撤廃せよ」、「日本帝国主義を打倒せよ」、「被圧迫民族解放万歳」などのスローガンを掲げて、京城帝国大学生・京城医学専門学校学生らが光州学生運動を起した一九二九年一月に、高木は京城帝国大学教授、高等官二等、朝鮮総督府視学委員であった。また、京城帝国大学法文学部では、一九三四年五月に、共産主義運動を主導した李載裕(イ・インジュ)の対面を匿った教授・三宅鹿之助が逮捕されている。このとき、高木は附属図書館長であり、同年二月には京城教化団体聯合会龍山教化区教化委員会顧問にも就任していた。しかし、高木は光州学生運動にも三宅逮捕にも言及しない。

青年期以来の(コスモポリタニズム)への距離を、植民地朝鮮において一層広げていったように思われる。かといって、徹

底した(民族主義者)になりきることでもできず、(世界性)と(民族性)が無媒介に共存する曖昧な立ち位置をとったのである。この曖昧さが、見てきたような軌跡を、高木の研究と教育に辿らせた。(インターナショナルイズム)は、それぞれの国家やその文化を尊重しつつ、国家を超えた連帯をめざす思想であるが、高木の(日本文芸学)には、連帯のための明確な理論が存在せず、日本と朝鮮の相互的な連帯と協力に踏み出すことはなかったのである。

#### 注

(1) 植民地朝鮮の研究は、それに先立つ大韓帝国時代(一八九七年建国)、日本と大韓帝国との間で締結された第二次日韓協約(乙巳保護条約)に基づく保護国時代(一九〇五年一月から、韓国併合二関スル条約)(韓国併合条約)が締結される一九一〇年八月二二日より前、また、一九四五年の解放後も視野に入れる必要がある。

(2) 吉奎盈(キキウ)「韓国における『万葉集』の翻訳について——その歴史と比較——」(『緑岡詞林 青山学院大学大学院日本語文論考』第44号、二〇一四・五)等。

(3) 「海ゆかば(冬扇房閑話)」(『現代コリア』第463号、二〇〇六・六)。

(4) 日本の「国文学」の移植という視点は、朴光賢(パククワン)『식민지 조선에 대한 국문학의 인식과 다카기 이치노스케(高木市之助)』

「植民地朝鮮への「国文学」の移植と高木市之助」『日本學報』59輯（二〇〇四・六）〔本誌に日本語訳所収〕による。

(5) 「朝鮮總督府官報」第3663号（一九三九・四・八付）、「朝鮮新聞」第13640号（一九三九・四・二（日）付）夕刊（題字下には「夕刊（土）」とある）。

(6) 視学委員の職務は、「朝鮮總督府訓令第二十九号」（一九二八・一〇・二六付）の「朝鮮總督府視学官及朝鮮總督府視学委員学事視察規定」の第六条に「視学委員ハ朝鮮總督ノ命ヲ承ケ指令セラレタル学事ヲ視察ス／視学委員視察ヲ終リタルトキハ一月以内ニ復命書ヲ提出スベシ」と定められている。

(7) 森田梧郎については、水島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』（第二部第四章・新体制運動下の朝鮮における「醇正ナル国語」の再編成―近代日本の「国語・国字問題」異聞―、ゆまに書房、二〇一一）が詳細を極める。

(8) 「朝鮮總督府官報」第3655号（一九二四・二〇・二〇付）。

(9) 「朝鮮總督府官報」第3657号（一九二四・二〇・二二付）、および第3662号（一九二四・二〇・二八付）では、留学先はフランス、ドイツ、イギリス、アメリカ合衆国。しかし、高木の回想録『国文学五十年』（Ⅳ・浦高時代からヨーロッパ留学へ）では、留学先としてイギリス、フランス、旅行先としてイタリアを挙げるが、ドイツ、アメリカ合衆国については留学先として言及していない。

(10) 「朝鮮總督府官報」第4086号（一九二六・四・六付）。

(11) 「朝鮮總督府官報」第4116号（一九二六・五・二一付）。なお、

『高木市之助全集』第一〇巻の「年譜」（以下、「年譜」）は、三月帰朝とする。

(12) 〔一回目〕「朝鮮總督府官報」第243号（一九二七・二〇・二〇付）、〔二回目〕第2464号（一九三五・四・二付）、第二八〇九号（一九三六・五・二七付）、第3124号（一九三七・六・六付）、第3402号（一九三八・五・二三付）。「年譜」は〔一回目〕について、一九二八年一〇月に「朝鮮總督府視学委員となる（一九三三年三月まで）」とし、〔二回目〕について、「（一九三三年三月まで）」とする。

(13) 「朝鮮總督府官報」第1569号（一九三三・四・二付）、第一八七六号（一九三三・四・二付）。

(14) 「朝鮮總督府官報」第1724号（一九三三・二〇・五付）、「京城日報」第8927号（一九三三・二〇・二二付）夕刊（題字下には「十月一日（土）」とある）

(15) 「京城日報」第9412号（一九三四・二・九付）夕刊（題字下には「二月八日（水）」とある）

(16) 「朝鮮總督府官報」第2166号（一九三四・四・二付）、第2513号（一九三五・五・三三付）。

(17) 「朝鮮總督府官報」第2528号（一九三五・六・一八）。

(18) 中山和子「植民地末期の朝鮮文壇と日本語文学（一）」『文芸研究』第69号（一九九三・二）。波多野節子によれば、朝鮮文芸会は、朝鮮總督府学務局によって組織された（李光洙<sup>イッソン</sup>―韓国近代文学の祖と「親日」の烙印）中公新書、一六〇頁、中央公論新社、

二〇一五)。また、中山によれば、「総督府の社会教化に協力を目的」とし、日本人一四名、朝鮮人一四名で構成され、時局歌謡発表会を主催し、「正義の凱歌」(崔南善 羽甘尅)、<sup>チナムソ</sup>「祖国日本」(寺本喜一)、「従軍看護婦の歌」(金憶)などの時局歌謡の制作と普及を行った。

- (19) 本稿は、ジョン・ソルトが、戦争下の北園克衛を捉えるため用いた、概括的ではなく、一日一日、あるいは一月一月の活動を明らかにして評価するという方法に依拠する(北園克衛の詩と詩学 意味のタペストリーを細断する) 田口哲也監訳、第六章・ファシズムの流砂、思潮社、二〇一〇)、同「平和な時代に振り返って鏡をのぞきこむと、後ろに小さく北園克衛が見える」  
「戦争と萬葉集」第2号、二〇二〇)。本稿の基礎資料として「植民地朝鮮における高木市之助年譜と著作一覧」を作成した(私のホームページ <https://manyogakushin22.wixsite.com/manyiny/database> に公開予定である)。
- (20) 趙景達「植民地朝鮮における勤儉思想の展開と民衆」宮島博史 金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅱ 日帝支配期』(日韓共同研究叢書)、慶應義塾大学出版会、二〇〇五。

(21) 高木のこの発言には吃音者に対する差別意識も認められるが、今はこの点については論じない。

(22) 高木のこの発言は、<sup>ヒュンヨクソク</sup>玄永燮の次の発言と呼応する。

朝鮮の地方色を出す映画と云へば、春香伝、沈清伝、蒼花紅蓮伝に尽きる。貧しい朝鮮の文学よ。民族主義的青年

文士達が朝鮮文学の精粹だとして我々に示すあの詩調なるものを読んで見てもそれを人類全体の魂を動かすに足る文学だとは云へないであらう。その大部分は漢文学の影響から解放されてゐないのである。私一人としては青丘永言や歌曲源流を読んで感激するし、女流詩人の許蘭雪の漢詩を愛読する。けれどもそれらが世界的水準に達してゐないことを認めざるを得ない。一つの萬葉集もなければ、一つの源氏物語もないのである。何か芝居をやるときまつて春香伝をやるのでは淋しい限りである。(朝鮮人の進むべき道)第一章・過去の朝鮮、一三頁、緑旗聯盟、一九三八。

一一一)

- (23) 西郷信綱「解説」『全集』第一巻、四八五頁、講談社、一九七六。
- (24) 安田敏朗「植民地のなかの「国語学」」二〇六頁、三元社、一九九七。

(25) 安田注(24)書は、資料を克明に辿り、時枝が朝鮮総督府の政策に加担していたことを明らかにして、厳しい批判を加えるが、なぜ加担したかについての説明がなされていないことにもどうかしさを覚える。

(26) 高田祐彦「高木市之助 文藝論の探求」近代「国文学」の肖像第5巻、一一一頁、岩波書店、二〇二一。

(27) 小川(新姓、小松)靖彦「作為された自然―高木市之助の環境論(文学と環境)―」(針原孝之編『古代文学の創造と継承』新典社、二〇一一)を参照されたい。

(28) 朴光賢注(4) 論文。

(29) 朝鮮時代の高木の著作や、現地発行の官報や新聞の多くは、日本の公共図書館や大学図書館では所蔵されていない。しかし、今日、韓国国立中央図書館、ソウル大学図書館でデジタル化されており、オンラインで閲覧が可能である。

(30) 本稿では植民地朝鮮における高木の著作については引用したもののみ書誌情報を記した。引用しなかったものの書誌情報は、小松靖彦作成「植民地朝鮮における高木市之助年譜と著作一覧」(注(19))を参照されたい。

(31) 執筆者名は「京町生」。現在、日本国内の公共図書館・大学図書館では、熊本県立図書館のみ所蔵(第2巻第1号、第2号、一九一六・三・六)。未見。

(32) 『全集』第一〇巻の「著述目録」(以下、「著述目録」)は、題を「アメリカの鴨緑江節」に誤る。

(33) 題字下に「本紙夕刊共十二頁」とある。「著述目録」は、題を「蛇と国文学」に誤る。

(34) 「著述目録」は、題を「朝鮮の自然に就て」、発行月を五月と誤る。

(35) 「明治天皇御製謹話」の書誌情報については「著述目録」による。未見。

(36) 漢字を礼賛した随筆「小心火車」(「京城雑筆」(京城・京城雑筆社発行)、一九三〇(号数・発行月未確認)、第五高等学校時代の教え子を回想する随筆「私を殺そうとした男」(「京城雑筆」、

一九三三・七(号数未確認)、「中年旅情」(「京城雑筆」、一九三四・一二(号数未確認)、長男清之助の追悼書「清香録」(私家版、一九三六・九)。「京城雑筆」の三編の高木の随筆は原本未見(発行年月は「著述目録」による)。

(37) 阿部秋生「国文学概説」第二章四・日本文芸学の方法、東京大学出版会、一九五九。なお、阿部は、「日本文芸学」の樹立をめざした岡崎と、「日本文学学」を志向した高木を対比している。

(38) 朴光賢によれば、高木は、一九二九年一月に、高橋亨(京城帝国大学教授。朝鮮学)らとともに済州島を訪れた(注(4) 論文)。

(39) 韓京子キョウシヤ氏の御教示によれば、「いなど」は、「イオド(離於島)」の誤りで、公式名称は波浪島とのことである。

(40) 朴光賢は、高木の論文「民族文学としての記紀歌謡」(後述)において、「民族」という用語が、「文化」や「未開」ということばの背後に結び付き、本質的に異なる層位のさまざまな民族文学を区分して論じる根拠として使われていることを指摘している(注(4) 論文)。その萌芽は、「民族と文学(済州島の文学から)」の(未開文化)という対比にあったことになる。

(41) 「内鮮風俗習慣のしるべ」は、日本の公共図書館・大学図書館では所蔵されていない。韓国国立中央図書館でデジタル化されているが、韓国国内の図書館でしか閲覧できない。韓国国立中央図書館ホームページ掲載の書誌情報によれば、「京城府公立普

通学校教員会」発行。その内容は、一、姿勢、二、容儀服装、三、挨拶、四、座作、五、敬禮、六、障子開閉、七、訪問迎接、八、食事、九、饗應、十、進物、十一、吉凶である。

(42) なお、高木の朝鮮語の知識は、「蛇文学」に窺える。「蛇」を表す朝鮮語を、日本語の「へび」の語源考証の材料としている。

(43) 「著述目録」は、題を「国文学の文芸的研究法」と誤る。

(44) 小川（新姓、小松）注（27）論文。

(45) 植民地朝鮮を生きた詩人・白石<sup>フジセキ</sup>の随筆（日本語訳題「虹が届きそうな万歳橋」）「朝鮮日報」一九三七・八二付）は、「アカシア、ポプラの影は美しく、高く澄みきった空に雲が清らかで、湧き水は冷たく甘く……、咸興はたしかに清々しく現れ出たところだ」（日本語訳）と賛美した（アン・ドヒョン<sup>안도현</sup>『詩人 白石』寄る辺なく気高くさみしく）五十嵐真希訳、一五九頁、新泉社、二〇二二）。高木に強い印象を与えた朝鮮の風景について、日韓双方からさらに検討されることを期待したい。

(46) 朴光賢注（4）論文。

(47) 一九四〇年六月刊行の今井邦子『萬葉読本』（第一書房）は、『萬葉集』を「濁った心」を清めるものと捉えている。『萬葉集』の〈環境〉を「清なるもの」と見る視点を歴史的に検討する必要がある。

(48) 佐佐木信綱『萬葉読本』（日本評論社、一九三五・一〇）、中河與一『萬葉の精神』（千倉書房、一九三七・七）、武田祐吉『萬葉自然』（弘文社、一九四六・九）など。小松（小川）靖彦「浪曼

主義」と『萬葉集』——中河與一『萬葉の精神』をめぐる（争と萬葉集）——（『繻』第29号、二〇一七・三）を参照されたい。

(49) この高木のコメントの真意は、『尋常小学国語読本』に示されている（八四頁）。「民族」を、魂までも「わがもの」としようとするのが「植民政治」である、という批判である。なお、高木は、エスペラントを各民族の共存共栄を前提とする共通語と考え、これに強い関心を示す一方、ゲーテの「世界文学」の考え方には共鳴できなかったと言う（『国文学五十年』、『全集』第九卷、一〇六―一〇七頁）。

(50) 高木の同級生である半田良平（一八八七―一九四五）と比較するとあまりに対照的である（半田については、小松靖彦『戦争下の文学者たち——『萬葉集』と生きた歌人・詩人・小説家』花鳥社、二〇二二）を参照されたい）。高木は、良平の存在を知っていた。「帝国大学」の和歌欄に、良平と上下二段を分け合って掲載されたことを、『国文学五十年』で述べている。なお、高木と良平は、一九一二年にともに東京帝国大学大学院に進学する。良平は現役補充兵として召集され、半年で退学。高木には召集はなかった。

(51) 「現代のイデオロギッシュな文学論」との関わり方について、撰取する必要があるが悩ましい、という肯定とも否定ともとれる発言をしている。

(52) 光州学生運動については、趙景達『植民地朝鮮と日本』（岩波新書、岩波書店、二〇一三）による。

(53) 本論は高木の〈コスモポリタニズム〉への反発については考察したものの、彼がなぜ〈民族性〉にこだわり続けたかについてまだ十分な回答を出せていない。高木の天皇観などが手がかりとなると思われるが、今後の課題としたい。また、(4)・(5)の時期の『萬葉集』研究と、その影響下にあった高木の教え子徐斗録の萬葉論については、改めて別の機会に論じたい。

依拠したテキスト(朝鮮時代の第一次資料以外)

高木市之助『国文学五十年』岩波新書、岩波書店、一九六七

高木市之助述、深萱和男録『尋常小学国語読本』中公新書、中央公論社、一九七六

高木市之助『高木市之助全集』第一巻／第一〇巻、講談社、一九七六  
／一九七七

【付記】本論は第31回戦争と萬葉集研究会(二〇二二・八・三)の研究発表に基づく。本論の資料収集については、韓京子氏に格別のご厚意を賜った。記して謝意を表したい。

(こまつ・やすひこ／青山学院大学教授)